

## イエスのことば 第50回

さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

(ヨハネ7:37~38)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元27年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元30年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1年余。その前半の約6か月間において、イエスは、異邦人の地域へ4回、旅行した。異邦人地域への4回の旅行は、退避（リトリート）と休息の時であったと同時に、弟子たちの訓練を目的とした。

2. リトリートから帰ってきた後、**紀元29年秋10月の仮庵の祭りから冬12月の宮きよめの祭りまで、約3か月の間**に起きた出来事

(1) 仮庵の祭りの前

① イエスの家族（弟たち）からの突き上げ（ヨハネ7:2~9）

② エルサレムへの旅（ルカ9:51~56、ヨハネ7:10）

③ 旅の途上で、弟子たる者の心得についての教え（ルカ9:57~62、マタイ8:19~22）

(2) 仮庵の祭りにおいて 指導者層との衝突

① 仮庵の祭りでの衝突【全体的な流れ】（ヨハネ7:11~52）

② 仮庵の祭りの期間中の個別的な衝突（ヨハネ7:53~10:21）

律法をめぐる、光をめぐる、メシアの神性をめぐる、

生まれながらの盲人の癒やしをめぐる、「羊飼ひ」（メシア預言）をめぐる

(3) 仮庵の祭りの後（ルカ10:1~13:21）

(4) 宮きよめの祭りにおいて（ヨハネ10:22~39）

□仮庵の祭りでの衝突【全体的な流れ】のアウトライン

A) 祭りの初日から3日目まで

B) 祭りの半ば=4日目

C) 祭りの4日目から6日目

D) 祭りの最終日=7日目

## A) 祭りの初日から3日目まで (ヨハネ7:11~13)

ユダヤ地方の人々は、イエスのことをうわさしていた。もしかしたら、イエスはメシアかもしれない。しかし、指導者層を恐れてイエスについて公然と語る者はいなかった。

11~13節 **ユダヤ人たちは祭りの場で**、「あの人はどこにいるのか」と言って、イエスを捜していた。群衆はイエスについて、小声でいろいろと話をしていた。ある人たちは「良い人だ」と言い、別の人たちは「違う。群衆を惑わしているのだ」と言っていた。しかし、**ユダヤ人たちを恐れた**ため、イエスについて公然と語る者はだれもいなかった。

- ▶ ユダヤ人たち：ヨハネの福音書では、3つの意味で使われる。①イスラエル民族全体、②ユダヤ地方に住んでいるユダヤ人（特にガリラヤ地方のユダヤ人と区別する意味で）、③ユダヤ人の指導者層。11節の「ユダヤ人たちは祭りの場で」は2番目、13節の「ユダヤ人たちを恐れたため」は3番目の意味である。

## B) 祭りの半ば=4日目 (ヨハネ7:14~24)

1. 祭りの4日目、イエスは神殿で教え始められた。

14~15節 祭りも半ばになったころ、イエスは宮に上って教え始められた。ユダヤ人たちは驚いて言った。「この人は学んだこともないのに、どうして学問があるのか。」

- ▶ ユダヤ人たち（ユダヤ地方に住んでいるユダヤ人たち）は、指導者層がイエスをメシアではないと公式発表していたこと、そしてイエスがユダヤ教ラビの学校で正式に学んだわけではないことを知っていた。彼らは、イエスが無学なのにと、神殿で教えることを疑問視する声をあげつつ、イエスの教える内容に驚いた。

2. イエスは、自分の教える内容は神から来るものであると答えた。

16~18節 そこで、イエスは彼らに答えられた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです。だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、わたしが自分から語っているのかが分かります。自分から語る人は自分の栄誉を求めます。しかし、自分を遣わされた方の栄誉を求める人は真実で、その人には不正はありません。」

3. 続けてイエスは、指導者層が自分をメシアではないと拒否したのは、自分が口伝律法に従わなかったからである。そもそも、指導者層がモーセの律法そのものを守ろうとせず、口伝律法を作ってそちらに従わせようとするのが間違いであると指摘する。そして、安息日に関する口伝律法に従わずに安息日に病人を癒やしたために、指導者層は自

分を殺そうとしている。それは誤ったさばきである、と答えた。

19～24 節 モーセはあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」

群衆は答えた。「あなたは悪霊につかれている。だれがあなたを殺そうとしているのか。」イエスは彼らに答えられた。「わたしが一つのわざを行い、それで、あなたがたはみな驚いています。モーセはあなたがたに割礼を与えました。それは、モーセからではなく、父祖たちから始まったことです。そして、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。モーセの律法を破らないようにと、人は安息日にも割礼を受けるのに、わたしが安息日に人の全身を健やかにしたということで、あなたがたはわたしに腹を立てるのですか。うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」

### C) 祭りの 4 日目から 6 日目 (ヨハネ 7 : 25～36)

1. エルサレムに住んでいて指導者層に近い人たちの中に、動揺が起きた。

25～27 節 さて、エルサレムのある人たちは、こう言い始めた。「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。もしかしたら議員たちは、この人がキリストであると、本当に認めたのではないか。しかし、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。キリストが来られるときには、どこから来るのか、だれも知らないはずだ。」

2. イエスの神性宣言

28 節 a イエスは宮で教えていたとき、大きな声で言われた。「あなたがたはわたしを知っており、わたしがどこから来たかも知っています。

➤ ユダヤ人たちは、イエスがガリラヤ地方のナザレの出身で、大工の息子であり、ラビの学校で学んではいないことを、知っていた。

28b～29 節 しかし、わたしは自分で来たものではありません。わたしを遣わされた方は真実です。その方をあなたがたは知りません。わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わされたからです。」

- イエスを遣わされた方は、「真実」なお方、すなわち、神である。
- イエスは神から出たのであり、神がイエスを遣わされた。
- これは神性宣言である。イエスは神が人となられたお方である。

3. イエスを捕らえようとする人たちがいたが、実際に実行した者はいなかった。

30節 そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

4. 群衆の中にイエスをメシアとして信じる人たちが多く出た。

31節 群衆のうちにはイエスを信じる人が多くいて、「キリストが来られるとき、この方がなされたよりも多くのしるしを行うだろうか」と言い合った。

5. 指導者層は、イエスを逮捕するよう役人たちに指示した。しかし、役人たちはイエスの応答にとまどい、手出ししなかった。(ヨハネ7:32~36)

#### D) 祭りの最終日=7日目 (ヨハネ7:37~52)

1. 仮庵の祭りは「水の祭り」でもある。イエスは次のように、人々に呼びかけた。

37~38節 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

##### (1) 「生ける水の川が流れ出る」というメッセージと祭りの関係

- ① 仮庵の祭りでは、水が重要な役割を持つ。祭司たちは、神殿を出てシロアムの池まで行って湧き水を汲む。容器に入れた水を神殿に持ち帰り、外庭から内庭に入るところで、15段の階段を上る。
- ② 1段上るごとに所定の詩篇(120~134篇)を歌う。それが「都上りの歌」
- ③ 内庭にある祭壇のまわりを回って、祭壇の台に水を注ぎ、喜びの声をあげる。仮庵の祭りの期間中、初日から6日目までは祭壇を回るのは1回であるが、最終日の7日目は7回である。7日目は「祭りの終わりの大いなる日」。
- ④ 「生ける水」とは、湧き水や、流れている川の水のこと。水たまりの水や、容器に保存された水は、生ける水ではない。
- ⑤ 仮庵の祭りで、生ける水を祭壇に注ぐのは、神の霊がイスラエルに注がれ、民族的救いが成就し、神の国が到来することを象徴する。

- (2) 「生ける水の川が流れ出る」というメッセージと聖霊の関係についての使徒ヨハネの解説

39 節 イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていないのである。

- イエスが栄光を受けるときは、復活と昇天。神の霊が下るのは、イエスの昇天から 10 日後。→ 使徒の働き 2 章
- 使徒の働き 2 章の出来事は、まだイスラエルの民族的救いではないが、ユダヤ人の信者たちに神の霊が注がれた。これは、イスラエルの民族的救いの前触れであり、予表である。

2. 群衆の反応：イエスをメシアとして認めるかどうか、意見が分かれた

40 節 このことばを聞いて、群衆の中には、「この方は、確かにあの預言者だ」と言う人たちがいた。

- 「あの預言者」とは、【モーセのような預言者】(申 18 : 18~19)。メシアを指すが、当時のラビたちの中では、メシアとは別人だという解釈もあった。

41~42 節 別の人たちは、「この方はキリストだ」と言った。しかし、このように言う人たちもいた。「キリストはガリラヤから出るだろうか。キリストはダビデの子孫から、ダビデがいた村、ベツレヘムから出ると、聖書は言っているではないか。」

- この人たちは、イエスがベツレヘムで生まれたことは知らなかった。

43 節 こうして、イエスのことで群衆の間に分裂が生じた。

3. この日もイエスを捕らえようとする人たちがいたが、実際に実行した者はいなかった。

44 節 彼らの中にはイエスを捕らえたかと思う人たちもいたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。

4. 役人たちの報告と指導者たちのかたくなな態度 (ヨハネ 7 : 45~52)

指導者たち「なぜあの人を連れて来なかったのか (逮捕してこなかったのか)」

役人たち「これまで、あの人のように話した人はいませんでした。」

指導者たち「おまえたちまで惑わされているのか。」

「ガリラヤから預言者は起こらない」、事実を反する ホセア、ヨナ、エリシャ